まえがき

認知言語学と呼ばれる言語学の一分野を、読者の皆さんはご存知でしょうか。言語学を専門とする方であれば、それなりにその基本的な考え方を、容易に頭の中に喚起することができるものと思われます。しかしながら、言語学という学問にあまり関心のない方、あるいは、認知言語学ということばは聞いたことはあるものの、その基本的な考え方はあまりよく分からないという方も、この広い世の中には、意外にも多くいらっしゃるのではないでしょうか。

そこで、本書では、認知言語学という学問領域がこれまでの研究で提示してきた、その基本的な考え方を、小説という形態でもって、分かりやすく紹介してみたいと思っています。つまり、具体的に述べるならば、認知言語学の研究者でまた大学教員でもある本書の主人公が、実際的な講義形式を通して展開していく認知言語学のストーリー（すなわちその基本的な考え方）が、本書では小説というジャンルでもって表現されるというわけです。

このような試みは、本邦初の試みであり、そういった意味では、認知言語学という学問を小難しいものとしてイメージしている方にとっては、そこからの解放がもたらされる良書になっているものと考えられます。言語学の専門家の方（大学院生を含む）が読まれても、本書はもちろんそれなりに興味深い内容かもしれませんが、筆者としては、それよりも、中高生や大学生、そして社会人など、一般の方を対象として、幅広い読者の皆さんに、本書を読んで頂いて、認知言語学という学問の中身を知って頂きたいと、強く願ってやみません。そして、本書を読んで頂いた結果として、認知言語学という学問に興味や関心をより一層高めて頂けるとするならば、それはまさに本書執筆の価値があったということになるように思います。

それでは、僭越ながら力作とまでは申しませんが、新鮮味の漂う『小説風「認知言語学入門」』の幕開けということにいたしましょう。

小説風「認知言語学入門」

目次

まえがき i
第1講 認知言語学とは何か？ 1
第2講 プロファイリング 16
第3講 スキャニング 29
第4講 ズーミング 40
第5講 ブリーチング 50
第6講 メトニミー 61
第7講 参照点能力 70
第8講 フレーム 79
第9講 カテゴリー化 89
第10講 シネクドキー 98

第11講　スキーマ化と拡張　108
第12講　メタファー　118
第13講　ブレンディング　128
第14講　スプリッティング　137
第15講　まとめ　146
あとがき　155

第1講　認知言語学とは何か？

研究室の窓から眺める景色は、とても気持ちがよいものである。新学期という季節柄のせいか、また新緑の木々が目の前に広がっているせいか、私はとても清々しい気持ちで、4階にある研究室に滞在している。

時計をチラ見しながら、そろそろ講義の時間が近づいているなあと思いつつ、とりあえずは、コーヒーの香りを鼻孔に湿らせながら、朝のひと時を満喫している。メールのチェックをしながらのことではあったが、特に目ぼしいメールは来ていなかった。

そして、いよいよ時間が来たなあと思いながら、席を立ち、研究室の戸締りをして、講義室へと向かっていった。

新学期の教室は、例年のことではあるが、新しい顔ぶれが揃うということもあり、はなはだ新鮮さがこころもち違う気がする。教室に入って、教壇に上がって、座っている学

生さんたちの方を向くと、知らない顔ばかりで、一瞬の緊張が走ったように感じられた。私は、人前でしゃべるのは元来あまり得意だとは言えない方なのだが、それでも授業は授業として自分の中で割り切って、教壇に上がっている。とかく、人前でしゃべるのが苦手なら、教員という選択肢以外にも、他にも適当な職が当然あっただろうにと思うのではあるが、私は研究者として生活することに生きがいを感じているので、だからこそ結果としてこのような職を選択することになったというわけである。

「ここの教室って、認知言語学っていう講義ですよね」

と、かなり緊張した面持ちで、前の方の学生さんたちに尋ねると、うんそうそうといった感じでこころよく会釈をしてくれる。

「研究室を出るのが少し遅れましたので、少し遅刻しましたかね。ごめんなさい。いろいろと授業科目がある中で、この認知言語学という科目を選んでもらえて、まずは、ありがたいなあと、感謝することから始めたいと思います。でも、様子見の方もいると思いますので、その場合は、今日の講義を聴いてみて、もしも興味や関心がありそうでしたら、履修登録をしてもらえたらと思います」

「この講義は、先にも言いましたが、認知言語学という名称の講義です。認知言語学と

いうことですから、その主眼は「ことば（あるいは言語）」がその探求の対象となってきます。言語学と一口に言っても、実際のところは、ことばという研究対象に対して、様々なアプローチ法があるわけですので、通常は、○○言語学というように、どういう視点でもって言語を探求していくのかということを表す専門的なことばが、その頭に付くことになります」

「この講義の場合には、「認知」ということばがその冠となっていますよね。つまり、言語現象を捉えていく際に、この場合には、認知的な視点でもって、それを探求していこうとする姿勢が、そこには盛り込まれていると言うことができます。それでは、ここで言うところの「認知」とは何のことでしょうか。まずは、その点を明確にしておきたいと思います。分かりやすく言えば、認知言語学という場合の「認知」とは、認知心理学という意味での「認知」に、ほぼほぼ近いところがあると思いますが、とはいえ、皆さんの中には認知心理学という学問を知らない人の方が多いでしょうから、これでは、何のことか分からないかもしれません」

「認知言語学という学問は、言語学とあるように、言語学の一分野を構成しているわけですが、その発端となったのは、生成言語学からの脱却という点に注目する必要がありま

す。認知言語学と呼ばれる言語学は、言語学分野の中では、比較的新しい学問分野の一つで、まだまだ若造と言っても過言ではありません。しかしながら、それ以前の言語学においては、そんな中で様々な言語研究が行われていたのは事実ですが、その主流として君臨していたのが、生成言語学ということになります。生成言語学について語り始めると、大変なことになりますので、この講義ではほとんど触れることができませんが、興味のある方は、ネットや書物などで調べてみてもらってもよいと思います」

「一般に、生成言語学も含めて、これまでの言語学分野においては、言語学という枠の中での探求であるわけですので、それは、言語のためだけに適用されるそれ単独の原理や原則というものを一心不乱に探求しようとしてきました。この考え方は、言語を研究対象とする言語学においては、言語を探求すればそれでよいわけですので、ある意味では、いたって自然な考え方であると言うことができます。しかしながら、認知言語学は、その殻を破り捨てることに尽力することになります。つまり、言語現象というものは、言語のためだけの原理や原則によって支えられていると考えるのではなく、言語のみならず、認知一般に観察される原理や原則によって、つまりは、誰もが日常生活で活用しているはずの一般的な認知プロセス（あるいは一般認知能力）を通して、言語現象を見直していこうと

する考え方を、言語研究の土台の中に取り入れていこうとしました。そうなると、当然のことながら、「生成」対「認知」という構図ないしは勢力図が仕上がってくることになり、現在の言語学でも、生成言語学と認知言語学は対立的な力関係の中に埋もれていると言うことが可能です」

「こういう風に見てくると、ここで言うところの認知言語学の「認知」というのが、何を意味しているのかは、自ずと理解できてくるものと思います。つまり、私たちが日常生活を送る中で、普段何気なく、無意識のうちに活用している一般認知能力のことを指して、ここでの「認知」ということばは、使用されているのです。したがって、このような意味での認知的な視点から言語という研究対象を分析していく言語学の一分野が、まさに認知言語学ということになります」

「この講義では、私たちの身近に存在している日本語の具体的な言語事例を挙げながら、このような認知言語学の世界を探検してみてもらいたいと思います。なお、この講義では、どちらかと言うと、認知言語学の知識を習得するということももちろん重要なのですが、それ以上に大事なこととして、そのような知識を活用できることに、その重点を置きたいと考えています。ですから、受講生の皆さんの中には、テストは嫌だなあと考えて

いる方も多いと思いますので、この講義では、筆記試験などというものは行わない予定で考えています。それよりも、この講義で学んだことを、皆さんの周囲にいっぱいあふれている身近な言語現象に適用して、一つのレポートにまとめることを重視したいと思っています。そうすることで、実際の理解の程度ももちろん把握できますが、何よりも、皆さんの言語への接近を、あるいは普段何気なく使用している日本語への接近を、及ばずながら、手助けしていきたいと考えています」

「ということで、この講義で単位認定を受けるにあたっては、授業への出席とレポートの提出ということで、その評価を行いたいと思います。なお、レポートの分量ですが、A4の用紙で、5枚以上10枚未満ということで、お願いしたいと思います。テーマは、この講義でこれから学習していく認知言語学の視点を援用しながら、身近な日本語を分析することで、必ず日本語の具体事例をそのレポート内に入れることを要件にしたいと思います。たまに、分量指定すると、おかしなことを考える方もいますので、あらかじめ注意しておきますが、A4で5枚以上10枚未満というのは、常識的な視点で理解していただけたらと思います。間違っても、A4の紙を5枚使用して、1ページに一文字だけ書くなんてことは、つまりレポート全体が5字しかないなんてことは、やめてくださいね。もちろ

ん、両面使用で、レポート全体が10字しかないなんていうのも、困りますので、注意してください。１ページあたりの分量は、あえて指定していませんが、常識的な範囲内でお願いしたいと思います」

「さて、次回以降の講義内容について、ここで簡単に整理しておきたいと思います。つまり、第２回目から第15回までに取り上げる予定の事柄を、ここで簡単に見ておくことにしましょう。この講義のシラバスを見ることができる環境にある方は、どうぞスマホを使ってもらっても大丈夫ですので、シラバスの授業計画を見ながら、以下は聞いてもらえると、理解しやすいと思います」

そのように発言すると、教室内の学生は一斉に、スマホ操作の音を鳴らし始めて、いくつかの個所では遠慮しがちなささやき声が響いてきた。

それにしても、私が学生の頃とは打って変わって、時代が大きく様変わりしたものである。スマホなどというものが登場してくることなど、つゆも知らず、私たちの世代では、携帯電話をいじっていたものであるが、現代では、多機能なスマホが登場してきて、いつでもどこでもネット接続できる環境というのは、いろいろな意味でありがたいものである。もちろん、実際には、スマホの登場による弊害もあるにはあるだろうが、私は、学

習面において、スマホの利点の方が大きいというのであれば、それを積極的に活用していけばよいという考えである。ひと昔前であれば、授業中に携帯など触るなんてけしからんなんて風潮があったかもしれないが、スマホ世代が全盛の昨今では、そんなことを言い出しても始まらない。学習面において必要性があるならば、教員も学生も、積極的にスマホを活用すべきであると、私は考えている。

「それでは、授業計画について、順を追って、見ていくことにしましょう。先にもお話ししましたが、認知言語学という学問領域の中核部分においては、言語現象を一般認知能力の観点から、分析なり説明なりしていくことになります。したがって、認知言語学の研究においては、その言語現象の背景に潜んでいるものと考えられる一般性の高い認知プロセスを特定していくことが最も大切なこととなります。その意味では、2回目の講義から14回目の講義までは、日本語の具体的な言語事例を参照しつつ、一つずつの講義で一つずつの認知プロセスを紹介しながら、全体で13種類の一般的な認知プロセスについて解説していきたいと考えています」

「まず、2回目の講義では、プロファイリングと呼ばれる認知プロセスを提示します。プロファイリングと言うと、どういうことなのか、その意味が明確には分からないと思い

ますが、要するには、プロファイリングは焦点化のことを意味していると言えます。一般に、何かの前提知識があれば、その一部にその認識を焦点化（あるいはもっと平たく言えば着目）していくことは、日常生活においても、比較的よくあることだと考えられます。まさに、そのような時に働いてくる一般認知能力が、ここでいうところのプロファイリングというわけです」

「次に、３回目の講義では、スキャニングについて、取り上げる予定です。スマホ世代の皆さんの場合には、「スキャンする」ということばを日常的に使用しているものと思われますので、この認知プロセスは比較的理解しやすいものだと考えられます。つまり、特定の対象に対して、視線を走らせていく認知プロセスのことが、スキャニングと呼ばれる認知プロセスです」

「そして、４回目の講義では、ズーミングについて、取り上げるつもりです。ズーミングと言うと、やや理解しにくいかもしれませんが、「ズーム・インする」とか「ズーム・アウトする」と言えば、比較的理解しやすくなるかもしれません。つまり、ある特定の対象に対して、その焦点を徐々に絞り込んでいくのがズーム・インの認知プロセスで、これに対して、ある特定の対象から、その焦点を徐々に拡大していくのがズーム・アウトの認

知プロセスです。そして、ズーム・インとズーム・アウトの認知プロセスの両者をまとめて、ここではズーミングと呼んでいるわけです」

「次に、5回目の講義では、ブリーチングと呼ばれる認知プロセスについて、取り上げます。これは、このままでは、何が何やら訳が分からないと言われるものと思われます。しかしながら、ブリーチングを日本語に訳すと、それは「漂白化」となりますので、そうなると、多少は理解がはかどるかもしれません。つまり、プロファイリングの認知プロセスでは、ある特定の対象に対して、注目度を高めることによって、強い認識を与えていったわけですが、ブリーチングの認知プロセスにおいては、その認識関係が完全に逆転していくことになります。すなわち、これまで認識されていたものが、その認識の強さを失っていくことで、その認識自体が完全に消失していく認知プロセスが、まさにブリーチングであると言えます」

「次に、6回目の講義では、メトニミーと称される認知プロセスについて、見ていくことになります。これは、近接性に基づいてその概念関係を確立させていく認知プロセスとして、一般には知られています。とはいえ、この定義だけでは、その理解は難しいものと考えられますが、最も簡潔に言えば、概念Aを理解していくのに、概念Bを経由して、そ

の理解がなされるという認知プロセスとして、とりあえず、ここでは理解しておいてもらいたいと思います」

「そして、７回目の講義では、参照点能力と呼ばれる認知プロセスについて、取り扱います。メトニミーという認知プロセスは、近接性に基づいて確立されてくる概念関係であることは、先にお話しした通りなのですが、これを支えているのが、参照点能力と呼ばれる認知プロセスということになります。参照点能力それ自体は、メトニミー以外の言語現象にも活用されていると、認知言語学の枠組みの中では考えられていますので、参照点能力というのは、メトニミーをも包括したより一般的な認知プロセスであると、ここではとりあえず、理解しておいてください」

「そして、８回目の講義では、フレームという考え方を取り上げることになります。私たちが言語を理解することができるのは、日常生活を営んでいくうちに自ずと頭の中に形成されてくる一般知識というものがあり、言語活動を行う際には、それが頭の中に喚起されてくるからこそ、言語理解は成し遂げられてくるものだと、認知言語学の枠組みでは考えられています。したがって、ここで言うところの一般知識のことが、フレームと呼ばれる概念になります」

「そして、9回目の講義では、カテゴリー化について、お話をしていく予定です。「カテゴリー」ということばは、聞いたことがあると思いますので、これは比較的理解しやすいものと思われますが、要するには、カテゴリー化とは、一定の対象を一定の基準にしたがって分類していく認知プロセスのことを意味しています。私たちの身の回りには、カテゴリー化があふれており、それがあるからこそ、言語理解も進んでいくというものです」

「次に、10回目の講義では、シネクドキーと呼ばれる認知プロセスについて、取り上げます。これは、認知言語学の枠組みの中では、先ほど述べたメトニミーとよくセットになって出てくる考え方なのですが、メトニミーの場合は近接性という概念関係が重要になりますが、シネクドキーの場合にはカテゴリー化という概念関係が重要になってきます。詳しくは、10回目の講義の時に、お話ししますので、とりあえずは、シネクドキーという認知プロセスは、カテゴリー化に基づいてその概念関係が確立されてくる認知プロセスのことであると、ここでは理解しておいてください」

「そして、11回目の講義では、スキーマ化と拡張について、お話しする予定です。スキーマ化というのは、一見難しそうな用語ですが、分かりやすく言えば、複数の対象を観察して、そこから共通項を認識していく認知プロセスのことを意味しています。そして、

このようにして取り出された共通項は一般にスキーマと呼ばれ、スキーマは拡張という認知プロセスを通して、さらなる新しい概念を生み出していくことになります」

「次に、12回目の講義では、今や認知言語学の主要研究テーマの一つともなっているメタファーについて、取り上げる予定です。メタファーと言うと、何のことか分からない方も多いかもしれませんが、「たとえ」とか「比喩」のことであると言えば、理解できる方も多いことでしょう。つまり、何かを何かでたとえていく認知プロセスが、ここで言うところのメタファーに相当していると言うことができます」

「次に、13回目の講義では、ブレンディングと呼ばれる認知プロセスを取り上げます。「ブレンドする」という表現は、もともとは英語ですが、日本語としても、日常的に頻繁に使用されていますので、この認知プロセスはかなり理解しやすいものと思います。つまり、複数のものを混ぜ合わせて、一つのものに統合していく認知プロセスが、ブレンディングであると言えます」

「そして、14回目の講義では、スプリッティングの認知プロセスについて、紹介する予定です。この場合も、「スプリットする」という表現は、すでに日本語になっていますので、この認知プロセスも理解しやすいと思います。つまり、一つのものとして認識されて

いたものを分割して、複数のものに分けていく認知プロセスが、スプリッティングと呼ばれるものです。したがって、スプリッティングの認知プロセスは、ブレンディングのちょうど逆プロセスになっているとも理解していくことが可能です」

「そして、最終講義となる15回目では、この授業で学んできたことのおさらいを、簡単にしておきたいと思っています。また、認知言語学という学問領域について、その知識をさらに深めていくのに最適な、超基礎レベルの入門書を、いくつか紹介したいとも考えています」

「以上が、この講義の授業計画のあらましです。具体事例を一つも出さずに、コンパクトに、各々の認知プロセスを説明してきましたので、若干ながら、消化不良になっているかもしれませんが、今日のところは、その点はあまり気にしないようにしてください。これからの授業を聴講してもらうことで、その消化不良は徐々になくなってくるものと思います。ちょうどキリのよいところで、そろそろ時間になったようですので、それでは、今日の授業はこのあたりにしておくことにしましょう」

それにしても、初回の授業は、本当に緊張しますよね。授業を終えて、教室を出ると、私の喉はカラカラ状態となっていました。初回にしては、少ししゃべりすぎたかなと少し